

オスマン朝時代の男性衣装

南・西アジア課程 トルコ語専攻

859611

名雪貴晴

- 第1章 はじめに
- 第2章 布地
- 第3章 上部の衣装
- 第4章 下部の衣装
- 第5章 頭部の衣装
- 第6章 履きもの
- 第7章 おわりに

第1章 はじめに

オスマン朝時代の男性衣装とって思い浮かぶものは何か？頭にターバンを巻いている、カフタンという豪華な上着を身に着けている、こうしたイメージが浮かぶに違いない。前者はイスラム世界の男性の姿であり、後者はスルタンの姿である。

しかし当然のことながらこれらが衣装の全てではない。ターバンを含め、かぶりものにはその形、素材において多様なバリエーションがあり、その違いによってそれを身につける個人の立場や職業を表し、カフタンにしてもスルタンが身に着ける上着だけを言うものではないし、その他にも様々な形の上着が存在する。そしてもちろん他の部分においても衣装の種類は数々存在する。

だがこれまで女性の衣装に関する研究¹はあっても、男性衣装に関するまとまった研究は見当たらず、カフタンやターバンの他にどのような衣装が存在するのかあまり知られていなかった。男性衣装が研究に値するものではないということであろうか。否そんな事はないはずだ。衣装はその時代時代の生活を視覚的に捉える大きな手がかりであり、それはその時代の文化を感じさせる最も親しみやすいもののひとつである。そしてオスマン朝時代の男性衣装は女性の衣装と同様、芸術的価値が高く美術品としての価値を有し、現存する

¹ Jennifer Scarce. *Women's Costume Of Near And Middle East*. Unwin Hyman. Great Britain, 1987

Apak, Melek Sevüktekin. *Osmanlı Dönemi*. Türkiye İş Bankası Kültür Yayınları, 1997

Tarihi Türk Kadın Kıyafetleri. Orta Doğu Video İşletmeleri. İstanbul, 1986

スルタンの衣装から、民衆の暮らしの息吹を感じさせるものまで多様な美をほこっている。

そこで本論では15世紀から18世紀を中心として、オスマン朝時代における西洋化される以前の男性衣装をとりあげ、衣装の素材、形態を紹介し、当時の男性衣装の多様性を明らかにしたいと思う。

本論はカタログ的な要素が強い。これは時代による衣装の特徴の変遷や、身分的なことに起因する差異といったテーマで研究する前段階として、上部の衣装、下部の衣装といった各々のパーツの理解が不可欠であり、先決であると感じたからである。これからのテーマの広がりの出発点として本論が存在できれば幸いである。

第2章 布地

それぞれのパーツを説明する前に服地となる織物について少し解説したい。¹

織物には大きく分けて綿織物、毛織物、絹織物の3種類がある。

綿織物業はオスマン朝国内では西アナトリア内陸部において発達していたが、また同時に輸入品に頼るところも大きかった。毛織物の輸入品がもっぱら西側から入ってきたのに対し、綿織物の主な輸入元は東方、それもインド産のものが主流であった。

オスマン朝の需要に応えるようにインドの主にパンジャブ、グジャラート、マドラス沿岸、ベンガル地方の4地域で綿布が生産された。パンジャブ地方で織られた布地は、特にその都市の名を冠したフェレスプリー、セマーニーがオスマン朝に輸出されていたことが記録されている。またインド綿織物生産の第2中心地であるグジャラートでは中東に輸出する綿布の生産でその技術を発達させ、紙のようにきめの細かいボアズを織りこれをオスマン朝にも輸出していた。

グジャラートに代表される西インドの綿布生産が中東向けに発達したように、インド南東のものはアジアに向けて、ベンガル地方を有する北東地域のものが北インドにむけてそれぞれ様々な綿織物を輸出していた。そしてこうした綿織物がイラン、アルメニア商人の手を通じて運ばれオスマン朝にもたらされていった。

毛織物には主なものにソフ、チュハなどがある。ソフはアンカラやトスヤで織られた国内ものであるが、チュハはオスマン朝内ではエインやテッサロニキで織られたが、その多くは、ヨーロッパからの輸入品であった。

チュハは縦糸と横糸とが羊毛のより糸で織られ、毛足が長いために光沢がなく、無地で丈夫な布地である。チュハは生産地によって名前が違っていたが布地自体は大して差があるものではなかった。

ソフはアンゴラやぎの毛(モヘア)でつくった細い糸で織られた布地で、15世紀末期以来、アンカラとその周辺を中心として発達した。アンゴラやぎの毛の輝きは素晴らしくその織りあがりも薄く光沢をもっており、毛織物でありながら絹織物と思われるほどであった。

かのスレイマン 1 世は緑のソフを好んだという²。またソフの上に水を掛けプレスし波状の模様をつけたものをムハツィエルと呼ぶ。

絹織物は原材料の入手が難しく高価な織物である。ブルサとその周辺が蚕の生育地であったことから、ブルサはアナトリアにおける絹織物の中心地となり、アレppoの絹織物と並び称されるようになる。また 17 世紀にはイスタンプルの絹織物もカディフェ、ディーバ、ケムハーなどを中心に生産され発達していった。国内においては他にシオス島のアトラス、ケムハー、アレppoのヘラーリ、タフタ、ダマスカスのタフタなどがある。

また輸入品は東方、西方から入ってきたが、その量は西側からのものが圧倒的に多かった。しかし織物の種類自体は少なかった。東方の絹織物にはインドのシルク、イラン産のものがあった。

絹織物は種類も多く衣装にあまり使われないものも含めて多種多様である。ここでは比較的衣装に使われる絹織物を取り上げてみたいと思う。

まずカディフェという織物であるが、これは所謂ベルベットであり、縦糸にも横糸にも絹糸を使っていて、表面が毛羽立だった織物である。この毛羽立ちは地組織を構成する縦糸の間に入れられた毛羽立たせるための縦糸に、交差するように入れられた、つまり横糸の位置に入れられた針金によって布地の表面に引き出され輪となった糸を切り開き作られている。また織り方はカディフェの一種で、二重織りのために花模様などの柄の毛足が長くなっているものをチャトマという。

こうしたブルサのカディフェは 16 世紀には他に類を見ない最上質のものになり、世界にその名が知られていた。またチャトマで作られた枕カバーも有名で、ヨーロッパ人は積極的にこれを求め、スルタンはヨーロッパに使節を送る際にこれらを贈答品とした。トプカプ宮殿のコレクションにはこれらの枕カバーが今でも多く残されている。

ケムハーは縦糸、横糸が絹糸でその上層の縦糸が金糸か銀糸で強化された二重織りの布地である。この布地からは様々デザインが生まれていった³。ケムハーは宮廷での需要が高く、イスタンプルには宮廷付属の工房もありその担当責任者 (kemhaci basi) は重要な役職であった。

絹織物のなかで最も価値あるものひとつにセラーセルがある。これは縦糸に絹糸、横糸には金糸と銀糸の合金糸か銀糸が使われている。非常に重く高価な布地で、宮廷では恩賜のカフタン用の布地として使われることも多かった。しかし 16 世紀半ばには金銀の消費を押しさえるために生産数も減っていく⁴。

このセラーセルの金糸や銀糸の変わりに黄色の絹糸を使って織られたものがセレンキである⁵。この絹糸は光沢があるため金糸や銀糸を織りこんだように見えた。

アトラスは今日のサテンで、細い絹糸で織られ、光沢のある目の詰んだ布地である⁶。スルトンのカフタンの仕立てにも使われた。アトラスはディヴァル刺繍 (厚紙製、または皮革の型の上に金銀糸を巻きつける 18,19 世紀に発達⁷) に最も適したものである。

非常に軽く柔らかいものにブルンジュックがある。これは縦糸も横糸も非常によく縫

りをかけたもので、織地は薄く表面は縮れたようになっている。ブルンジユクは男性や女性のシャツ、ふとんのカバー、シーツなどに使われた。ブルンジユクに麻糸が混紡されたものをヘラーリという。

この他の絹織物として、宮廷の人々や裕福層の者のはおり着に使用されたフタ⁸、縦糸、横糸にねじりをかけた厚手の布地ディーバー、絹糸と綿糸を混紡した糸を使い、木目模様をもつハーレ⁹（図4）などがある。

次に織物の色彩に関して記す。¹⁰

色の種類は比較的少ないが色調の柔らかさ、鮮やかさ、配色などでバリエーションを豊かなものにしていく。最も好まれた色は赤（緋色）、その他は順に青、白、緑、ベージュ、黒となる。

織物に使用される色彩であるが、これは地色に使われる基本的色彩と、模様をはっきりさせるために用いられる副次的色彩に大別される。基本的色彩は赤、紺、白など、そして副次的色彩は黄、緑、ベージュ、青、黒などである。

こうした色彩の調和は「同じ色の濃淡を用いるのではなく、補色を並べることによって醸し出された。色は現実の色に合っているか否かによってではなく、感覚に合うかどうかによって選ばれる。このため、トルコの織物の色彩には、理論よりむしろ感覚が支配しており、独特の美しさはここから生まれるのである。」¹¹

赤色は重要なものでトルコ赤（緋色）と呼ばれる。これは茜からとれるもので水や日光にも強く色褪せしにくい。これに明礬やクロム明礬をプラスして変化をつけた。またこの赤色染料は19世紀に合成染料が発明されるまでヨーロッパに盛んに輸出されていたものである。

紺色はカリンの樹皮と種子を煮出してとる。

黄色は西洋茜から得られる。西洋茜は緑色の色調を変化させるためにも使われた。これに様々なものを加えていろいろな色調を出したり、ベージュや茶色などの色を作り出していた。茶色はこの他にも西洋梨の葉、胡桃の樹皮、しなの木、玉葱の葉などを使い色の濃淡をだしていた。

緑色は桃の葉を煮出し、そこに硫化銅を加えて取られる。これは色褪せしにくい、ほうれん草やウスベニタチアオイから得られたものは色褪せしやすい。

黒色はハッカを使う。農民はこのハッカの葉や根とさびた鉄片を一緒に煮て、水や日光にも強い光沢のある黒色を得ていた。

青色は藍の若木から得られるが、藍は熱帯性の植物でトルコでは成育しないのでインドから輸入していた。

当時の染色技術の発達にはギルドによるところが大きい。そうして染色はひとつの産業として発展し、その中心地にイスタンブル、ブルサ、エディルネ、コンヤ、カイセリ、トカットなどがあつた。また染料の生産技術は代々受け継がれていくものであつたため、その成分や生産方法は書き残されることなく秘密にされていた。

第3章 上着および上部の衣装

それではここから各々の衣装を解説していきたいと思う。

まずはカフタン (kaftan) から始めよう。これは衣装のなかで一番上に着るもので特に男性のものを言う。現代でいうジャケットの位置にあたる衣装である。

カフタンというものは「あらゆる種類の上着をいう」¹²のであってスルタンが着用する豪華な上着だけをカフタンというのではない。「昔の社会ではイエニチェリからスルタン、小さな子供から老人までカフタンを着ていた」¹³という。

しかしここではスルトンのカフタンを中心に話を進めていく。残念ながら一般の民衆がどのようなカフタンを着ていたのかを窺い知る資料がなく、素材、形態に関して述べることができないからだ。それに比べスルトンのカフタンは、今でもトプカブ宮殿に数多くのコレクションが残されており、実物を目にすることも可能である。

ではスルトンのカフタンを紹介していこう。カフタンは下着の上に着るイチ・カフタンとその上に着るドウシュ・カフタン (dis kaftan) に大別できる。イチ・カフタン (iç kftan 図1) は絹織物、ハーレ、ソフといった布地から作られる。そのほとんどは無地である。形は前あきで、襟がなく、袖が手首に向かって細くなりボタンで留められるようになっている。この長い袖は、短かくて幅の広いドウシュ・カフタンの袖から見えるようにするためである。ドウシュ・カフタン (図2,3,4) は我々が所謂カフタンと呼んでいるものである。丈の長いもの、短いものがある。丈の短いもので特にフルカ (hrka) と呼ばれるものもある。スルトンのカフタンは非常に豪華で、その布地にはケムハー、チャトマ、セラーセル、セレンキ、アトラス、ハターイー (絹糸と金糸で織られた布地、他には宮廷の婦人服用に使われた) などが使われた。夏服、冬服と同じ布地が使われていたが、冬服はキルティング仕立てになっていた¹⁴。



図 1

図 2,3 は丈の長いカフタンで、図 4 は短めのものである。図 2 はセレンキ織りのもので、つまり三円文の部分が金糸ではなく黄色の絹糸になっている。またキルティング加工が施

してあることから冬用と思われる。図 3 のカフタンはチャトマから作られたもので図 2 のものと違い、襟がないデザインになっている。図 4 は前出のとおりハーレ織りのもので、木目模様が見える。



図 2



图 3



図 4

丈の短いフルカはスルタンのみならず民衆も男女問わず愛用していた。よって素材となる布地は重く高価なものから粗雑なものまで様々なものが使われた。腕の部分はあまり広くなく襟はない。前部分は掛けボタンで留められるようになっており、左右にひとつずつポケットがついているのが一般的な形である。またフルカは表地と裏地の間に薄くワタがはいっており、baklava 縫いという格子縫い、若しくは菱形の糸目を持つキルティング加工がしてある¹⁵。

カフタンのなかでもひとときわ豪華なものがヒラット (hilat 図 5,6) であろう。これはスルタンの礼服用のカフタンであると同時に、高い官職に任じられた者へ、またスルタンに謁見する者へ下賜されたものである。ヒラットにも上記のような布地が使われ、その形態は身ごろを広く取っており、裾が長くゆったりとしている。また袖は非常に長い。そして

細部にわたって金糸や銀糸、絹糸などで刺繍され、ボタンには普通のものではなく、宝石入りのものが使われるなど贅沢を極めている。



図5



図6

特徴的なその袖は床にとどきそうなほど非常に長い。これはイエンという補助袖であり、

式典においてはこの部分に接吻させた。またイェンに手は通さず、図 6 からわかるように肩口を開いている切れ間から手を出していた¹⁶。

次の衣装にすすむ前にスルタンのカフタンやヒラットに使われている特徴的な文様に関して少し説明したいと思う。

よく使われていたモチーフには月や太陽、図 2 のような三円文、またチンタマニ文様と呼ばれる三円文と波状文を組み合わせたものがある。植物文様ではチューリップ、カーネーション、ヒヤシンス、バラなどの花、他につる巻きの枝、三日月形の葉、プラタナスの葉、ざくろの実や花、松かさなどが用いられた。ちなみに図 3 のカフタンにはチューリップとザクロの文様、また波状文も見られる¹⁷。

「織物文様の構図の基本テーマは永遠思想である。最も一般的な構図は、モチーフが布一面に広がる連続文様である。もう一方のタイプはメダリオンであり、開いたり閉じたりしながら、次々にからんでゆく楕円や円形文、あるいは軸上に一部重なって並んだ個々の円形文様である。」¹⁸

「やはり永遠をテーマとした構図でよく使われたものに互いにからみ合って上から下へ伸び、枝の左右に葉や花をつけた枝文様もある。文献では、こうした文様をドラシュマ・ナクシュル（徘徊文様入り）と呼んでいる。」¹⁹と記されている。

文様の説明はこのくらいにして衣装の説明に戻ろう。

ヒラットと同じように下賜されていたものがある。それはキュルク（kürk 図 7,8）という毛皮のついた上着である。キュルクというのは柔らかく美しい毛皮そのものであると同時に、そうした毛皮に包まれた上着を意味していた。



图 7



図 8

オスマン帝国の毛皮の流行は 16 世紀ヨーロッパ全土にわたる毛皮の流行と時を同じくす

る。オスマン帝国の毛皮の主な輸入元はロシアであった。この時期、オスマン帝国の毛皮加工技術は非常に発達し、政府みずからが指導にあたらうとした。

1829年の服装改革²⁰以前にキュルクは大きな権力や富の象徴として重要な意味を持っていた²¹。ヒラットと同じようにスルタンから地位などに応じて下賜されるものであり、スルタンに謁見する外国使節にも礼服として着用させた。またこうした種々のキュルクを保護するためにトプカプ宮殿内にはキュルク専用の部屋も設けられていた。²²

キュルクに使われたのはクロテンやヤマネコ、キツネ、ミンク、オオカミなどの毛皮であった。そのなかでも特に貴重なものがクロテンのものである。これらの毛皮は背中、首、腹、足に分けられ、それぞれ毛先から根元部分まで三つに分けられていた²³。キュルクで特に価値の高いものはセラーセルの布地とクロテンの毛皮を用いたものである。また一般的なキュルクは足首まで覆うものだが、膝丈ほどの短いものを特に *serhadi* と言い、袖のないものをカパニチャ (*kapanıça* 図8) と言うことがある。

カパニチャという言葉は *kapanmak* (「包まれる」の意) というトルコ語起源の語にスラヴ語ないしはペルシャ語の接尾辞をつけたものである²⁴。

カパニチャは腕の部分がなく、幅の広い折返しの毛皮つきの襟がついたものである。肩口にはごく短い袖があり、その口には風を防ぐ様に 4,5 パルマック (*parmak* 長さの単位で約3センチ) の幅で毛皮がついている。この毛皮にはクロテンやキツネの毛皮が用いられた。そして襟の下には背中にかけて地面にまで伸びる、幅のある飾りの帯紐を付けていた。この帯紐の先端には襟につけた毛皮と同じ素材の房飾りをひとつずつ縫い付けた。この帯紐は通常垂らしておくものだが、時には一方を手を持ち、もう一方を手を巻きつけていた。カパニチャには大宰相がスルタンに拝謁する際、一時的に貸し出されるという習慣があった。また極まれに下賜されることもあった。²⁵

カパニチャのように折り返しの毛皮つきの大きな襟を持つものにコントシュ (*kontos*) がある。これはチュハに毛皮をつけているもので素材の点でカパニチャより劣る。カパニチャと違う点は狭く長い袖があることだ。²⁶

ここからは上記のような特に高価な布地を使ったものや豪華な刺繍が施されているといったもの以外の衣装を挙げる。

まずはエンターリ (*entari*) を紹介しよう。これは元来綿織物から作られた女性のものであったが、古くから男性も身につけていた。ちなみにスルタンなども身につけ、カフタンの下に下着の上から着用していた。スルタンのエンターリ (図9) も含め、丈がかなり長くなっている。エンターリは就寝時に下着の上に着用するものであったが、1829年の服装改革までは外出着としても通用していた。その際には下着やドン (*don* ズボンした) の上に直接着るのではなく、シャルヴァル (*salvar*) やチャクシュル (*çaksır*) を穿いたその上から身につけていた。²⁷

ジュッベ (*cübbe* 図10,11) はウレマー層の人やメドレセの学生、モスクなどの雑用係などが着た上着で、実に様々な人の着衣であったことが窺われる。またこれはウレマーの

一種の法衣でもある。





図 11

ジュッベの布地は夏用にソフやリンネル、冬用には羊毛が使われた。常に無地の布地で、色はラクダ毛色や黒が好まれた。その形は襟がミンタン (mintan) のように柔らかく、2センチほどの高さがある。腕の部分はゆったりとしていて手首まで伸びており、裾は長く足首まである。²⁸そのジュッベのひとつに富裕層、特にウレマーが着ていたビニッシュ (binis) というものがある。民衆が着ていたジュッベとの違いは胸のところが広く、腕の部分もよりゆったりと長くなっている。これも夏用はリンネルやソフから、冬用は羊毛から作られ、色はラクダ毛色や黒色である。

少し変わったビニッシュには軍の連隊長などが着ていたものがある (図 12)。袖が広く、腕の裏側に肘から袖口に向かってスリットが入っていて、腕を下におろしている時は手の先がすっかり覆われるくらい長くなっている。²⁹



図 12

ドラマ (Dolama 図 13,14) は男女ともに身につけた、チュハ、チャトマ、ケムハーの布地などから作られた上着のひとつである。宮廷の使用人、大臣などの従者、またバラタジなどいろいろな人が身につけたが、特にイエニチェリに用いられた。



图 13



図 14

その前部分は開けられるようになっているが、ボタンで留めるのではなく、重ね合わせてクシャック (kusak) という帯で締める。袖はミンタンのように手首のところで細くなっている。ドラマが他と完全に違うところは、その裾を、歩きやすくするために、た

くし上げてまとめ、腰に巻いているクシャックに差し込んでいるところだ。図 14 は横から見たところだが前部分を上げているのがわかる。³⁰

次にあげるジェブケン (cebken) とジャメダン (camedan 図 15) は上記のような上着とは違い極丈の短い上着である。

ジェブケンには兵士や行商人、農民などの衣装に見られる。これは穿くものと一組で同じ布地から作られる。そしてその穿きものは年齢や社会的地位、職業などによって変わってくる。ジェブケンには下着の上に身につけ、その形は襟なしで、袖はながく、丈は腰のあたりまでと短くなっている。丈が短くなっているのは、その下に巻いているクシャックが見えることで体を大きく見せようとする考えからである。袖は他の上着と同じように肩の上からぐるりと縫い付けられているものと、肩の上の部分だけが縫い付けられていて、わきの下の部分が開いているものがある。開いている部分からは下に着ているものが見えるようになっている。その袖口や襟ぐり、裾の部分には年齢や地位によって絹糸や金糸で刺繍が施される。

ジャメダンはジェブケンと同じように民衆が着ていた、チュハやカディフェでできた短いベストである。最も価値のあるものとされたのは金糸入りカディフェのものである。チュハ製のものでもカディフェ製のものでも、金糸の刺繍の入った朱色や紫色のように目立つものが好まれた。胸や襟のふちは絹糸で飾られ、その他の脇や裾などのふちは金糸や銀糸で刺繍されていた。そして前部分にやや大きめのくるみのボタンと、編物でできたボタンがついているのがジャメダンの特徴である。

また同じように民衆に広まっていたベストにフェルメネ (fermene) というものがある。これもチュハなどから作られ、刺繍が施されていた。ジェブケンと違うところは前部分が重なるようにして留められるところである。³¹

下着に関しても若干記しておこう。

現代のトルコ語でワイシャツなどを表す *gömlek* が下着という意味で用いられた。もともとの表記は *gönlek* であった³²。ギョムレックは素肌の上に直接身につけるものである。男物は裾が膝より上にあり、腰から下はドンの中に入れる。ちなみに女物は足首までである。

ギョムレック用の布地は薄く柔らかく、色は白色か、または白地に赤、黄、青みがかかった薄い色の縞があるものである。農民や漁師、下男など民衆の下着は荒い布地から作られたが、スルタンの下着など、最良のものとなるとブルンジックから作られ、ヘラーリギョムレック (*helali gömlek*) と呼ばれた。³³

また下着の上に着る軽いシャツにミンタン (*mintan*) というものがある。裾は尻を覆うくらい長く、長袖で、前部分は首から胸にかけて開いており、3.4 個のボタンで留められるようになっている。袖の先にはあて布をつけ、その上に真珠貝や石のボタンをつけていた。裾はシャルヴァル (*salvar*) やポトゥル (*potur*) 等の穿きものの中に入れ、上にジェブケンやジャメダン等の上着を身につけた。³⁴

その他に冬用の衣装の下に着るズブン (*zıbn*) というワタ入りのベストがある。これは冬

用のカフタンの下に必ず身につけるものであった。³⁵

オスマン朝社会においても西欧のように服装によってある程度の階級、社会グループの分類ができていたであろう。オスマン朝では服装に関する法律が整備されていたようで、こうした法律のなかではスルタンも奴隷のようにその法に従う必要があったとされている³⁶。その法律がどれほど強制力を持って服装を決めていたのだろうか。

ミニアチュールではどうしても簡略化されてしまうのでわかりづらいが、図 11 などに見られるように何枚もの衣装を重ね着している絵に出会う。これら 1 枚 1 枚に何らかの名称があったのかは不明だが、こうした重ね着にも制約があったのだろうか。また重ね着をすることが何らかの意味をもっていたのだろうか。重ね着ということに関しては全く資料がないのでなんとも言い難いが、これからの衣裳に関するひとつのテーマになり得るであろう。

第 4 章 下部の衣装

それでは次に下部の衣装を紹介しよう。穿きもの自体の種類はそれほど多くはなく、極端にゆったりしているものと比較的細身のものがある。ゆったりした穿きものでまず思い浮かぶものにシャルヴァル (salvar) がある。シャルヴァル (図 16) は男女ともに身につけていた穿きものである。男物は大部分が羊毛の織物から、女性物は絹の織物から作られていた。男物のシャルヴァルは西洋のズボン、パンタロンが伝わるまでチャクシュルやポトゥルとともにあらゆる階層が穿いているものであった。形は図を見てもわかるように足全体ゆったりとしていてかなり広くなっている。長さは足首の上くらいまであり、裾はきつくない程度に狭くなっている。裾の端やポケットの淵はひもやリボンで飾られ、時には金のひもなども使われていた。



图 16

シャルヴァルは腰をウチュクル(uçkur)でとめる。このウチュクルを、ドン(don)をとめるウチュクルと区別するためにシャルヴァルベンド(salvarbend)と言うこともある。シャルヴァルベンドは両端が1カルシュ(karış 親指と小指を広げた長さ)ほどの幅で金糸や銀糸またはその他の色の絹糸で刺繍が施されていた。そして飾りに身につける、刺繍されたハンカチやナブキンのようなものを結び付け、きらびやかな部分をシャルヴァルベンドの下に出してシャルヴァルの前に垂らしていた。³⁷

ウチュクルというものはドン、シャルヴァル、チャクシュル、ポトゥル等を書くときに腰にしめる細帯のようなものである。ドンのウチュクルの幅は2パルマック、シャルヴァルやチャクシュルのそれは3,4パルマックと広がっている。シャルヴァルやチャクシュルのウチュクルの端には絹糸や金糸や銀糸で刺繍がされていて、結んだ後にその刺繍のある端を飾りとしてシャルヴァルやチャクシュルの前に垂らしていた。

このウチュクルが通せるように穿きものの上端には管状になったウチュクルルック(uçkurluk)が作られていた。ウチュクルルックの前にはウチュクルが通せるように穴が開いており、細い棒を使ってウチュクルを通していった。この細い棒にはツゲやコクタンの板から作られたものもあり、より高価なものになると銀細工が施されていた。この細い棒の穴に細い紐が結び付けられ、その紐にウチュクルを結び付けウチュクルルックに通していた。これはウチュクルを通しやすくする工夫であった。

ドンのウチュクルルックはドンと同じ布地から作られていたが、シャルヴァルやチャクシュルのウチュクルルックは穿きもの自体のものとは別の布地から作られ、腰の部分に縫い付けられていた³⁸。ウチュクルの説明はこれくらいにして穿きものの説明に戻ろう。

次にチャクシュル(çaksır 図17,18)であるが、これは例外なくチュハから作られており、色は、軍人は階級によって色分けされるが、他は好みに合わせてラクダ色か青色といったところである。形をしてみると腿の部分はシャルヴァルと同じようにゆったりしているが、長さは膝の下か脛くらいまでしかない。裾はシャルヴァルと同じように窄まっている。裾の下には脛から足首にかけてトズルック(tozluk)というものが巻かれたり、靴下を履いたり、何も付けず剥き出しの場合もある。また他には裾に薄いなめし皮でできた長靴が縫い付けられているものもある。



图 17



図 18

同じチャクシュルといっても特に戦闘状態にないイエニチェリが身につけるチャクシュルは他のものと少々異なる。裾が膝の上で窄まっており、脛は完全に剥き出しの状態になる。場合によってはトズルックをつける時もあるが、覆うものを付けることはあまりない。

39

上記のトズルック (tozluk) についてももう少し詳しく説明しよう。トズルックはチュハやカディフェから作られたもので、その多くは表面に金糸で刺繍が施されていた。トズルックはチャクシュル等を身につけた時に、靴下を履かない人の脛が汚れるのを防ぐために付けられたもので、長さによって二種類に分けられる。ひとつは膝から足首までを覆うもので、くるぶしや踵、甲の部分は覆っていないもの(図 19)、もうひとつはトズルックの裾に、踵や甲を覆うための葉のような布があるものだ。



図 19

トズルックに似たものでドラック (dolak) というものがある。これも膝からくるぶしくらいまでを覆うものだが、こちらは穿いているポトゥル等の裾の上から巻きつけたものである (図 23)。ドラックはかなり以前、古代から残っていて、特に旅をする時や狩猟時に使われていた。そして近代になってからは陸軍の服装に取り入れられていたが、一度付けると長い間ほどかないために、足を清潔に保っておくのに障害になるということで、共和制になった時に軍隊の服装の規則によって廃止された。⁴⁰ (図 20,21,22 残念ながらこの図からはトズルック、ドラックの判断は難しい。)



図 20



图 21



図 22

シャルヴァルやチャクシュルと違って、膝まではややゆったりしているが、膝から下の部分が細く、狭くなっている穿きものがポトゥル (potur 図 23,24 後述の sikma の可能性あり) である。これは「折り目」や「しわになった」といった意味を持つ pot が語源になっている。



図 23



図 24

ポトゥルの前部分は前掛けのように、股の間にいくつか折り目が作られ束ねられている。後ろ側はシャルヴァルのようにしわがあり、ふいごのようになっていて大きく垂れ下がっていて、最も大きいものになると膝くらいまでの長さになる。

またもうひとつ特徴はその裾にある。ポトゥルの裾の前と後ろには、全てのポトゥルにはないが、ひとつずつひらひらとした布があり、踵や甲の部分を覆っていて、ちょうどポトゥルに縫いつけられたトズルックのようである。そのためポトゥルを穿いて裸足でいると、足の指と、端から靴紐が見えるだけで踵は見えなくなる。

ポトゥルの一種で、同じように股のところにしわがあり、穿いた後に脛の部分をボタンで留めるスクマ (sıkma) というものもある。裾はくるぶしの上でまっすぐに切られておりポトゥルの裾とは違っている。⁴¹

さてこうした穿きもの下には何をはいているのだろうか。

肌の上に直接身につける下着はドン (don 図 25) と呼ばれるズボン下である。こうした下着を特に *iç donu* と呼ぶ。これは腰の下から足全体をくるむ下着である。腰はウチュクルで留められ、股の部分はゆったりとしていて、裾は窄まっており履きやすいようにスリットがはいている。そして裾には口を結ぶための紐などが縫い付けられている。また紐の変わりにボタンで留めるもの、腰をウチュクルの変わりにこれまたボタンで留めるものなどがある。またドンには裾が足首の少し上で切られているものもあった。これは着やすいように裾口はやや広くなっており、裾を紐などで結ぶこともなかった。またチャクシュルを穿く時はその長さに合わせて膝上くらいの長さの短いドンを身につける。

中流以上の層ではドンを寝間着として用いていたこともある。近代に入ってからこの習慣は残っていて、パジャマのズボンの下にこのドンを穿いている人が数多く存在していた。

ドンを作る布地は昔から社会的な身分によって異なるものであった。ブルンジュックから作られるものは身分の高い者のために、そして目の粗い布地から作られたものは民衆に広まった。⁴²

オスマン朝時代の男性が穿いているものをいくつか紹介してきたが、穿いているもの自体よりも、またこの時代の衣装全体から見ても非常に印象的なものは腰に巻いている、帯状のものではないだろうか。なぜならシャルヴァルを穿く時も、チャクシュル、ポトゥルを穿く時も、またスルタンからその他宮廷に働く人々、はたまた民衆、乞食まであらゆる階層の人が、そして男女の区別なく身につける共通の衣装だからである。

クシャック (*kusak*) と呼ばれるこの帯状のものは二種類に分けられる。ドン等の下着の上から巻かれるものと、もうひとつは我々が絵などで目にする、一番上に巻かれたものである。前者はイチ・クシャック (*iç kusak*) と呼ばれ、後者はドウシュ・クシャック (*dis kusak*) と呼ばれる。

イチ・クシャックは季節によって綿、羊毛、綿と羊毛の混紡からできたものと使い分けられていた。腰のあたりから胸の下あたりまでしっかりと巻きつけられていた。

ドウシュ・クシャックはシャルヴァル、チャクシュル、ポトゥル等の穿きもの、ミンタン等のシャツの上から巻かれていた。こちらは地位や財力などに応じて、羊毛、綿などの布地から作られ、最も価値のあるものとしてシャル⁴³から作られたものがある。ドウシュ・クシャックは男性衣装にとって飾りであると同時に、前部分を捻り、短剣やナイフ、タバコや財布などの小物を入れてポケットのように利用した。⁴⁴

ドウシュ・クシャックの代わりに時たまケメル (*kemer*) が使われることもあった。またケメルは単独ではなくドウシュ・クシャックの上に富の象徴として巻かれることがあった。

こうしたケメルはクシャックと違って腰に一回りさせてバックルで留めるものであった。男女ともに、様々な階層に用いられ、中流層や庶民がつけていたものはなめし皮から作られたものだったが、上流層が使うものになると宝石つきのものから金糸、銀糸で刺繍されたもの、金糸、銀糸そのもので織られたもの、金銀の飾り金具からできたものなど大変豪華である。⁴⁵

下部の衣装はミニアチュール、または他の図版にしてもはっきりとそれに焦点を当てて描かれているわけではない。そのほとんどは上に着る長い丈の衣装に隠されてしまっていることが多く、衣装のなかで主役になることはないようだ。確かに特徴といっても特に際立ったものはなく、シャルヴァルなどはあらゆる階層が身につける基本的な穿きものである。被りものなどが持つ社会的地位などの象徴のように、形態から読み取れる情報量は少ないであろう。

第5章 頭部の衣装

ターバンの下はどうなっているのだろうか？

ターバンのように巻くものに限らず、その他のかぶりものなどの下には共通してタッケ (takke) というものをかぶる。これは頭の汗をかぶりものが汚れるのを防ぐ働きがある。タッケは薄い布地から作られており、アラビア語で丸天井を意味する tak が語源となっている⁴⁶。昔の男性の多くは髪を剃りあげていたため、タッケは防寒の働きから室内用のかぶりものとしても利用され、また寝る時もタッケを脱がなかった。その後薄くワタが加えられ、かぶりものの下に身につけるようになっていったのである。

それではここから具体的なかぶりものについて話を進めよう。

まず sarık と kavuk の説明からはじめる。これら両者ともに日本語ではターバンと訳される⁴⁷。しかしこれらは正確には違うものである。Sarık は sarmak (巻く) が語源であるように、「巻くもの」である。そして kavuk は sarık のなかに「かぶるもの」である。

sarık は kavuk や külah、fes 等のかぶりものの上に巻くターバンやショールに与えられた総称である。これが一般的に言うターバンである。そしてその巻き方によって burma sarık、civan kası sarık、katibi、dardagan、perisani 等の名前が与えられている。

そしてスルタンやウレマー、大臣やその他の国人は常に白いターバンを様々な形で巻いていた。またイスラム神秘主義教団では tacsik や sikke という名の külah に白、黒、赤、緑などの sarık を巻き、その色や形を教団の目印としていた。⁴⁸

sarık が我々の言うところのターバンであるので sarık をターバンと表記することにする。カヴック (kavuk) に関してももう少し説明を加えよう。

カヴックの表地はチュハから作られ、その中には綿織物からできた裏地があてられた。

表地と裏地の間にワタが入られ、そのワタの層はカヴックの種類によって色々な縫い方がされていた。

カヴックには、それがどんな種類であろうと必ずターバンが巻かれていた。カヴックはターバンなしで身につけるものではなかったのである。そのためカヴックそれ自体の形で名前があるのではなく、カヴックとターバンとを合わせて名前が付けられていた。よってターバンの巻き方がカヴックの名前を表すこともあるので、ターバンの巻き方の名称とカヴックの名前は厳密に区別されるものではない。

カヴックに巻くターバンは毎日巻きかえるものではなく、汚れた場合に洗うために取り外すものであった。カヴックは非常に大切に扱われ、外出時に身につけたものが型崩れしないよう、独特な形をした *kavukluk* という名の棚に置かれていた。さらにこだわる人はツゲの木から作られた頭の形をした型を使い、なおかつほこりで汚れないように *kavuk örtüsü* と呼ばれるカバーを掛けていた。またターバンの巻き方は多種多様であったためそれを巻くことや手入れなどが専門職として成り立っていた。⁴⁹

前出のターバンの巻き方に関して解説を加えていくが、上記のようにこれらは同時にカヴックの名前としても通用するものもあることを記しておく。

まず *burma sarık* (図 26) はイエニチェリ起源の巻き方である。ターバンを綱のように捻り、先のとがったカヴックに巻きつけていた。その豪華さから行列などの場面に適していたとされる。



図 27

次に *katibi* (図 27) であるがこれは特に書記官等の役人が巻いていた形である。ターバンをカヴックの周りに、後ろの首筋のあたりから巻き、前側は額の上で交差するようにする。この時カヴックの下の淵が見えるようにする。これには色、飾りなどの違いで様々なものがあり、地位や役職に応じて使い分けられていたと思われる。

Civan kası sarık はターバンの表にとても細い金糸で刺繍されたものを言う。巻き方というよりは、特にこの刺繍のことをそう言う。このターバンは若い男女に用いられていた。

*Dardagan*⁵⁰ (図 28) も *perisani* も乱雑に巻いたものである。この乱雑さは雑に巻くというより、個々人が自由に巻くことができたということを表している。*Dardagan* と *perisani* 両者の明確な区別は不明である。⁵¹



図 28

ここからは kavuk について話を進めていく。

ミュジェツヴェゼ (Mücevveze 図 29) はスルタンをはじめ、宰相や大臣、国の重要な高官が身に付けた儀式用のカヴックである。下から上に若干広がった円筒形のもので高さは 35 センチくらいである。その基礎は厚紙のようなもので作られ、表面に薄い白いターバンが巻かれている。上部表面は赤いチュハで作られ少し厚みをもっており、そこにまたチュハからできたクルミ大の突起がある。



図 29

このミュジェッヴェゼによく似たものにセリーミー (selimi 図 30) というカヴックがある。これはセリム 1 世がかぶり始めたもので、形はミュジェッヴェゼと同じような円筒形で白いターバンを巻いていたが、高さが 65 センチほどとより高く立派なものである。またミュジェッヴェゼについていた突起はついていない。

スルタンの他にも、宰相が軍の高官を任命する儀式の際に、またその他高官が都市視察の時に身につけていた。またエユップ参詣の際に行われる行列でもかぶっていたが、その

後スルタンの御前に上る時はミュジェッヴェゼの代わりにカルラーヴィー（kallavi）を身につけた。⁵²



図 30



図 31

このカルラーヴィー（図 31）は宰相や大臣などが身につけた公式のカヴックである。非常に軽く柔らかい上等のフェルトから作られ、形は四角錐で、高さは約 40 センチほどである。土台となるカヴックの周りにターバンが巻かれ、その上にさらに正面右側から左側へ、下から上に、金糸でできた幅 4 パルマックほどのリボンを飾りとしてつけていた。

また宰相や大臣の墓石にはこのカルラーヴィーに模した石が付け加えられていた。⁵³

そのカルラーヴィーと同じように墓石に使われることが多かったカヴックにホラサーニー（horasani）というものがある。これはオスマン朝の大宰相府につめるの高官特有のカヴックである。

「上部は平らになっており、その淵には絹糸で刺繍が施されている。周りには白、または緑のターバンが巻かれ、中のカヴックは上部が 2 パルマックほど見えるようになっている。またターバンの交差する下部は三日月の形に開いている。」という特徴がエクレム・コ

チュにより書かれているが、*Serpuslar* に登場する図 37 からはその特徴が判然としない。

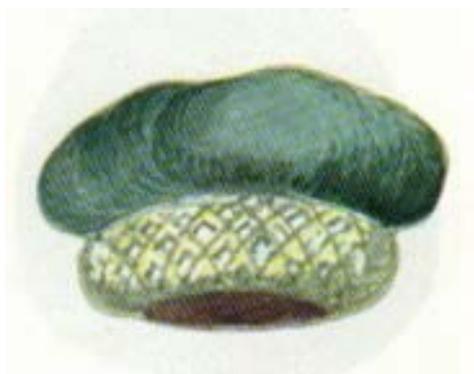


図 37

図 37 のカヴェックは下部が網状に巻かれていると思われる。こうした種類のカヴェックはカフェスイ (kafesi) と呼ばれるものでその大きさや色は図 38,39,40 のように様々なものがある。これらカフェスイの形は墓石に多く見られ、その墓石に記載されている内容から、これらを政府の高官、また何らかの役職の人物が身につけていたであろうということが予想されている。そしてホラサーニーはこのカフェスイのタイプに分類されているが、正確な形態はわからない。⁵⁴



图 32



図 38



図 39



図 40

図 32 のようなカヴックはオェルフ (örf) と呼ばれ *burma sarık* のように巻かれ、上部は緑色、そして金糸のリボンで飾られている。これはオスマン朝のシェイヒュルイスラー

ムなどの高位のウレマーが公務の際に身につけていたものである。⁵⁵

この他にも正確な名称、特徴が明らかでないカヴックが多数ある。図 41,42,43 のようなカヴックである。特に図 41 のカヴックはミニアチュールにおいても極めてよく見受けられるもので、スルタンを含め多くの人物がこれによく似た白いカヴックを身につけている。そのなかで図 41 のような別の色のカヴックを身につける人物が描かれている。このカヴックにおいて色が何らかの意味を持っていることは容易に想像できる。しかしこれまでの研究ではその違いがわからないためその意味を知ることはできない。



図 41

これから紹介するキュラフ (külah) はこれまで解説してきたものとは違い、巻くものではなく被るものと捉えられるものである。キュラフという名は特定のかぶりものを表すのではなく、sarık や kavuk のような「巻くもの」ではない、単純にかぶるものの総称であると考えられる。キュラフと呼ばれるものの種類は様々であるが、共通した特徴として挙げられるのはカヴックに施されるような縫い目がなく、フェルトで作られているものが多いということである。⁵⁶

キュラフのなかでも特にイエニチェリの被るキュラフには印象的なものが多い。イエニチェリは日常ではフェルトのカヴックをかぶり、その上にねじったターバンを巻いていたが、その他にも状況に応じて色々な形のキュラフを身につけていた。そのイエニチェリのキュラフをいくつか紹介しよう。

ウスキュフ (üsküf 図 33,17) はイエニチェリの儀式用のかぶりものである。ウスキュフは頂点のフェルト部分が後ろに大きな長方形を形成するように折れ曲がっている。このフェルト部分は yatırtma と呼ばれ、長さは肩まであり完全に首を隠している。



図 33

ウスキュフには興味深い飾りがある。それは正面中央につけられた *kasıklık* あるいは *tüylük* と呼ばれる部分である。これには遠征などの場合にはスプーン (*kasık*) を挿し、儀式や行列の際には、年齢や地位によって様々な羽根 (*tüy*) 飾りを付けていた。⁵⁷

ウスキュフと同じように先の折れ曲がったキュラフにはバラタ (*barata* 図 34) というものもある。これはチュハから作られたもので、1826 年のイエニチェリの解体以前に宮廷の警護兵や使用人が身につけていたかぶりものである。色も赤、白、ラクダの毛色など様々あり、特別重要ではない違いによってではあるが *bostancı baratası*、*haseki baratası* 等に分けられる。⁵⁸



図 34

イエニチェリの儀式用のキュラフにはカラファトゥ (kalafat 図 35,36) というものもある。カラファトゥは若いイエニチェリから高位のイエニチェリまで身につけていたもので、これもチュハから作られており、下から上に広がった形をしている。縦に幾つか層を並べた形のかぶりものに、ターバンをこれも平行に何層か斜めに巻きつけたものである。このターバンがはじめから縫い付けられていたものも存在する。⁵⁹



图 35



図 36

その他にも図 44,45 のようなウスキュフの別タイプ、門番兵のキュラフ(図 49)、また羽根飾りで特徴づけられるもの(図 46,47,48)などがある。特に印象的な図 46,47 の羽根飾りは *süpürge sorguç* と呼ばれるもので、これはイエニチェリの司令官や次官などの高位の者が儀式や行列の際にかぶりものにつけた大きな羽根飾りである。形がほうき(*süpürge*)に似ていることからこの名がついている。またスルタンの私兵からなる護衛もこの羽根飾りを行列の時につけていた。⁶⁰



图 44



图 45



图 46



图 47



图 48

かぶりものは服装のなかでも極めて重要なものとされる。それは昔から名誉や地位の象徴とされていた。よってかぶりものからある程度その人物のおかれている状況を窺うことができるわけである。しかしそれが常に特定の人物に対応したものかというところではないようだ。イエニチェリなどが被るキュラフは非常に特徴のあるものなので限定された人物を表していることが多いであろう。しかしカヴックのようにターバンを巻いたものは実際幅広い層に使われていたものである。図 27 のカヴックは書記官が身につけたといわれるが、オスマン朝社会のあらゆる層で見られたとされている⁶¹。また形は同じように見えたとしてもカーティビーと呼ばれていないものも存在する。それは図からは判断できない素材やターバンの巻き方の違い、または色や羽根飾りなどによって分類できるものだと考えられる。そうするとカーティビーというカヴックの形から得られる情報は意外と少なく、それに付随した羽根飾り、そして色などが本体の形よりも何らかの特別な意味を持っていると言えるかも知れない。羽根飾りや色といった要素を組み合わせることで服装に関する制約をより複雑にし、こうした被りものがより細かく社会的地位や職業を表していたとすれば、上記で解説したことは被りもの全体のほんの一部分でしかないのである。

第6章 履きもの

履きものに関しては資料があまりに少ないために簡単な説明を付記することにとどめる。履きものは図版を見る限りその種類が多いようには思えない。履きもの名前として見つかる数は下記のものより多いが実際際立った違いが見られるものではない。ミニアチュールを見ても背の高いものか低いものかといった程度のことしか情報として得られないのが実際のところである。基本的に履きものは *pabuç* という言葉に集約される短靴が多い。そのいくつかを紹介する。

バシュマック (*basmak*) は長いあいだ男女問わず履かれた靴である。甲の部分は開いているが指先はずんぐりとして丸くなっており、踵は高く踏み潰して履くものではなかった。脚の裏はあまり薄いものではなく、硬い皮革の靴底で鉄鋳が打ち付けてあった。

このバシュマックの形はイエメニ (*yemeni*) に似ており、そのイエメニもまた民衆や軍人が履いていたものである。これは赤や黒や黄色のなめし皮から作られていた。これはバシュマックと違って踵が柔らかく、踏み潰して履いていた。

フィラル (*Filar*) というものもまた踵を踏み潰して履くことがあったもので、素足で履いた短靴であるが上記のものとの明確な違いは判然としない。⁶²

特に黒海沿岸の男性特有の履きものとして広まったチャプラ (*çapula*) はそのつま先が上に持ちあがっているのが特徴である。踵もあるがイエメニのようにつぶして履くことはない。夏も冬も身につけるが、夏は素足に、冬は靴下やメスト (*mest*) とともに履いてい

た。⁶³

またブーツのことを現代トルコ語では *çizme* というが、その昔はペルシャ語でブーツを表す *muze* という言葉で呼ばれていた。脛までのもの、膝下まであるものなど高さは様々で、スルタンから労働者まで幅広い層がブーツを身につけた。⁶⁴

メスト (*mest*) はくるぶしまで隠れるブーツのような形をしたものである。足の裏、表面は柔らかいなめし皮で作られている。基本的に履き口が広がっていて少しゆったりとしているが、この履き口を紐で結ぶようになっているものもあり、これは *lapçın* と呼ばれている。またスルタンや宰相は長いブーツに合わせて、膝まであるメストを履くことがあった。メストは靴下のように履く靴で、単独で履くものではなく、外出時にはこのうえに *pabuç* や *kundura* といったものを履いていた。つまり室内履きの役目をしていただけである。またメストのしたには汚れを防ぐという意味で靴下を履いていた。⁶⁵

当時 *pabuç* 等の外履きのまま家の中に入ることはなかった。家の中では靴下を履いたり、素足で生活していた。そしてテルリック (*terlik*) もまた室内用として利用されていたもので、靴下や素足で生活している家でも客人用にはテルリックを用意していた。テルリックはいわゆるスリッパで踵や側面の部分が開いていて、指先の部分をくるむようにできている。足裏は硬い皮でできており、表部分はなめし皮や、ケチェ、チュハ、カディフェといった織物からできている。⁶⁶

第7章 おわりに

これまで上部、下部、そして被りもの、履きものと各々の衣装の解説をしてきた。しかし当然のことながら全ての衣装に言及できたわけではない。資料不足から名称の判然としないもの、名称を知ることができても現在ではどの衣装にあたるのか判らないものなどその数は多い。そして個々の衣装がそれを身につける人物をどれだけ表現しているかということについても多くを語ることはできなかった。

またその一方で全てのものに名称を求めることが果たしてできるのかということもある。現代においてジャケットがその形の違いによって厳密に分けられるわけではないように、当時の衣装が細かい差異によって分けられ、その全てが名称を持っていたと言えるだろうか。ジュッベなどは別段厳密に分類する必要はないのかもしれない。説明したような上着こそがジュッベであり、袖にスリットが入ろうと、幅が広がっていようとそれはジュッベというくりに入ってしまうわけである。とするとジュッベという衣装を身につける層がより大きくなり、そして身につける層が幅広いとなればそこから人物に関する特定の情報を得ることが難しくなるのは間違いない。

しかしそれは形態のうえでの分類を考えた場合である。衣装は様々な要素が組み合わさって創られている。その他の色や素材、飾りなどの様々な要素によって分類され、ある要

素が衣装を身につける人物の社会的地位や職業などの情報を明らかにすることもある。

本論では衣装を4つの部分に分けて解説してきた。しかしそれぞれについて上記の要素を深く追求できたわけではない。ひとつひとつの要素を分析していくにはよりテーマが細分化されるべきであろう。上部の衣装における重ね着やその色の組み合わせ、または被りものの色や羽根飾りなど、そしてもちろん上部、下部の衣装、被りもの、履きものの個々の衣装についてもより深い研究が必要である。そして同時にこれら衣装全体の組み合わせということもひとつのテーマになり得る。また本論ではほとんど取り上げることのできなかった民衆の衣装など社会的地位に関する特徴や差異、地域や時代による変化といった研究課題も残されている。本論は男性衣装の研究における出発点に過ぎない。これからの更なるテーマの広がりを期待するとともに、自らも本論を基としてその広がりを実現すべく努力していきたいと思う。

<参考文献>

- ・ Boraie, Sherif. *Oriental Costumes*. Zeitouna Cario. Egypt, 1988
- ・ Fenerci Mehmed. *Osmanlı Kıyafetleri*. Vehbi Koç Vakfı. İstanbul, 1986
- ・ İzzet Kumbaracılar. *Serpüşlar*. Türkiye Turing Ve Otomobil Kurumu Yayını. y.y., t.y.
- ・ Koçu, Reşad Ekrem. *Türk Giyim Kuşam Ve Süslenme Sözlüğü*. Sümerbank Kültür Yayınları. Ankara, 1969
- ・ Kütükoğlu, Mübahat S. *Osmanlılarda Narh Müessesesi Ve 1640 Tarihli Narh Defteri*. Enderun Kitabevi. İstanbul, 1983
- ・ Laqueur, Hans-Peter. *Hüve'l-Baki*. Tarih Vakfı Yurt Yayınları. İstanbul, 1997
- ・ Nancy Lindisfarne-Tapper and Bruce Ingham. *Language of Dress in the Middle East*. Cruzon Press. Great Britain, 1997
- ・ Özel, Mehmet. *Folklorik Türk Kıyafetleri*. Türpaş. Ankara, 1992
- ・ Sevim, Mustafa. *Gravürlerle Türkiye Giysiler, portreler 2*. Kültür Bakanlığı. Ankara, 1997
- ・ Sevin, Nurettin. *Onüç Asırlık Türk Kıyafet Tarihine Bir Bakış*. Kültür Bakanlığı. Ankara, 1990
- ・ 護雅夫監修 『トプカプ宮殿博物館 スルタンの衣裳』 トプカプ宮殿博物館全集刊行会, 1980
- ・ 護雅夫監修 『トプカプ宮殿博物館 宮廷絨緞』 トプカプ宮殿博物館全集刊行会, 1980
- ・ 東京国立博物館、中近東文化センター、朝日新聞社編 『オスマン朝の栄光 トルコ・トプカプ宮殿秘宝展』 中近東文化センター、朝日新聞社, 1980

< 図版一覧 >

- ・ 図 1 イチ・カフタン 護雅夫監修 『トプカプ宮殿博物館 スルタンの衣装』トプカプ宮殿博物館全集刊行会,1980 (以下『スルタンの衣装』) p66
- ・ 図 2 ドウシュ・カフタン 『スルタンの衣装』 p105
- ・ 図 3 ドウシュ・カフタン 『同上』 p7
- ・ 図 4 ドウシュ・カフタン 『同上』 p64
- ・ 図 5 ヒラット 『同上』 p70
- ・ 図 6 ヒラット 『同上』 p91
- ・ 図 7 キュルク Boraie,Sherif. *Oriental Costumes.Zeitouna Cario.Egypt,1988 p51*
- ・ 図 8 カパニチャ Özel,Mehmet. *Folklorik Türk Kıyafetleri. Türpaş. Ankara,1992*
(以下 *Kıyafetleri*) no.1
- ・ 図 9 エンターリ 『スルタンの衣装』 p110
- ・ 図 10 ジュツベ *Kıyafetleri* 17
- ・ 図 11 ジュツベ Sevim,Mustafa. *Gravürlerle Türkiye Giysiler,portreler2. Kültür Yayını. Ankara, 1997* (以下 *Gravürlerle*) no.121
- ・ 図 12 ビニツシュ *Kıyafetleri* 13
- ・ 図 13 ドラマ *Gravürlerle* 020
- ・ 図 14 ドラマ *Gravürlerle* 096
- ・ 図 15 ジェブケン、ジェメダン Koçu,Reşad Ekrem. *Türk Kuşam Ve Süslenme Sözlüğü. Sümerbank Kültür Yayınları. Ankara,1969* (以下 *Sözlüğü*) p50,51
- ・ 図 16 シャルヴァル *Gravürlerle* 019
- ・ 図 17 チャクシユル *Gravürlerle* 100
- ・ 図 18 チャクシユル *Kıyafetleri* 76
- ・ 図 19 トズルック *Kıyafetleri* 87
- ・ 図 20 トズルック or ドラック *Kıyafetleri* 86
- ・ 図 21 トズルック or ドラック *Kıyafetleri* 74
- ・ 図 22 トズルック or ドラック *Gravürlerle* 111
- ・ 図 23 ポトウル *Gravürlerle* 109
- ・ 図 24 ポトウル *Gravürlerle* 064
- ・ 図 25 ドン *Sözlüğü* p93
- ・ 図 26 ブルマ サルック *Sözlüğü* p46
- ・ 図 27 カーティビ *Kıyafetleri* 15
- ・ 図 28 ダルダアン İzzet Kumbaracılar. *Serpuşlar.Türkiye Turing Ve Otomobil Kurumu Yayını. y.y.,t.y.* (以下 *Serpuşlar*) resimler p4
- ・ 図 29 ミュジェツヴェゼ *Kıyafetleri* 11

- ・ 図 30 セリーミー *Kıyafetleri* 26
- ・ 図 31 カルラーヴィー *Kıyafetleri* 7
- ・ 図 32 オェルフ *Kıyafetleri* 5
- ・ 図 33 ウュスキュフ *Kıyafetleri* 70
- ・ 図 34 バラタ *Kıyafetleri* 53
- ・ 図 35 カラファトゥ *Kıyafetleri* 60
- ・ 図 36 カラファトゥ *Kıyafetleri* 64
- ・ 図 37 ホラサーニー *Serpuşlar resimler* p11
- ・ 図 38 カフェスイ *Kıyafetleri* 12
- ・ 図 39 カフェスイ *Kıyafetleri* 58
- ・ 図 40 カフェスイ *Kıyafetleri* 13
- ・ 図 41 不明 *Kıyafetleri* 8
- ・ 図 42 不明 *Kıyafetleri* 65
- ・ 図 43 不明 *Kıyafetleri* 67
- ・ 図 44 ウュスキュフ *Kıyafetleri* 27
- ・ 図 45 ウュスキュフ *Kıyafetleri* 28
- ・ 図 46 羽根飾りつきのカヴック *Kıyafetleri* 61
- ・ 図 47 羽根飾りつきのカヴック *Kıyafetleri* 50
- ・ 図 48 羽根飾りつきのカヴック *Kıyafetleri* 62
- ・ 図 49 門番兵のキュラフ *Serpuşlar* 表紙
- ・ 図 50 (参考) 不明 *Serpuşlar resimler* p16
- ・ 図 51 (参考) 宮廷内のヘルヴァその他の菓子類を作る職人のキュラフ *Kıyafetleri* 47

1 この章は以下の文献を参考にした。

- ・ 護雅夫監修 『トプカプ宮殿博物館 スルタンの衣裳』トプカプ宮殿博物館全集刊行会, 1980 (以下『スルタンの衣裳』)
 - ・ 護雅夫監修 『トプカプ宮殿博物館 宮廷絨緞』トプカプ宮殿博物館全集刊行会, 1980 (以下『宮廷絨緞』)
 - ・ 東京国立博物館、中近東文化センター、朝日新聞社編 『オスマン朝の栄光 トルコ・トプカプ宮殿秘宝展』中近東文化センター、朝日新聞社, 1988 (以下『オスマン朝の栄光』)
 - ・ Kütükoğlu, Mübahat S. *Osmanlı Narh Müessesesi Ve 1640 Tarihli Narh Defteri*. Enderun Kitabevi. İstanbul, 1983 (以下 *Defteri*) p59-69
- 2 『オスマン朝の栄光』 p120
- 3 「オスマン帝国時代には 8 種類のケムハーが生産されたといわれ、織り方の特色によって、それぞれ、単色、ペシュリー、金欄、ドラビー、捺染(ダービー)、ブルサ赤紫、アマシア赤、薔薇園と名づけられている。」『スルタンの衣裳』 p140
- 4 「金糸や銀糸が織りこまれるので、この布地を織る織機は絶えず政府の監督を受けた。金銀の消費を抑えるため、しばしば勅令によって織機の台数を減らす努力がはられた。

-
- (中略) イスラム暦 1022 年第 9 月 (西暦 1613 年) にイスタンブールの法官に対して発布された勅令においてセラーセルの織機は 100 台に止め、それ以上は操業させないよう命じられている。』『スルタンの衣裳』 p145
- 5 「セラーセルより廉価なため、イスラム暦 985 年 (1577~78 年) に「イスタンブールにおいて 100 台以上のセラーセル用織機を稼働させないこと、ただし残りの織機所有者は損害をこうむらないため、セレンキを織ることが適当である」旨の命令が出された。』『スルタンの衣裳』 p150
- 6 アトラスの種類は縦縞 (タクラル) 横縞 (チュブクル) 白生地 (サーデ) ケトレシズ、多色 (エルヴァン) スルマ・イル・エルヴァーニー、ギュルニューミー (薔薇のかんばせ) 大理石 (メルメリー) メルテバーニー、フィレンギー (ヨーロッパ製) などである。『スルタンの衣裳』 p124
- 7 刺繍に関しては『スルタンの衣裳』 p216-231 に詳しい。
- 8 浴場で体を拭いたあと、タオルの上に巻きつけた。この使用方法は民衆にも広がっている。『オスマン朝の栄光』 p121
- 9 木目模様は織り上げられた後、2 本のローラーの間を通し圧搾して揉むことのできる『スルタンの衣裳』 p129
- 10 『宮廷絨緞』を参考にした。
- 11 『宮廷絨緞』 p226
- 12 『スルタンの衣裳』 p138
- 13 Koçu, Reşad Ekrem. *Türk Giyim Kuşam Ve Süslenme Sözlüğü*. Sümerbank Kültür Yayınları. Ankara, 1969 (以下 *Sözlüğü*) p138
- 14 『スルタンの衣裳』 p120, 121
- 15 *Sözlüğü* p129, 130
- 16 *Sözlüğü* p130, 131、『スルタンの衣裳』 p121
- 17 『オスマン朝の栄光』 p121、『スルタンの衣裳』 p123, 124
- 18 『オスマン朝の栄光』 p121
- 19 同上
- 20 マフムート 2 世による西欧化の一環として行われそれまでの衣装やターバンは廃止されていった。Nancy Lindisfarne-Tapper and Bruce Ingham. *Language of Dress in the Middle East*. Curzon. Great Britain, 1997 p149-155
- 21 毛皮は季節に応じて使い分けるのではなく、スルタンの個人的趣味に左右され、宰相や大臣はスルタンが着用した毛皮になっていた。
余談だが 17 世紀にイブラヒムはクロテンの毛皮の愛好家として有名で、「宮廷内の離宮も広間も全てクロテンの毛皮をもって装飾すべし。財力の多少にかかわらず、すべてのものはクロテンのついた衣装を一組ずつ宮廷へ持参すべし」という命令を発布した。『スルタンの衣裳』 p166
- 22 *Sözlüğü* p164-166、『スルタンの衣裳』 p165-167
- 23 ala(最も美しいとされる毛先部分) evsat(中間部) edna(根元部分) の 3 部分 *Sözlüğü* p165
- 24 『スルタンの衣裳』 p121
- 25 *Sözlüğü* p144, 145
- 26 *Sözlüğü* p158
- 27 *Sözlüğü* p102-105、『スルタンの衣裳』 p130
- 28 *Sözlüğü* p57, 58
- 29 *Sözlüğü* p39
- 30 *Sözlüğü* p92, 93
- 31 *Sözlüğü* p49-52, 111, 112

-
- 32 *Sözlüğü* p125
- 33 *Sözlüğü* p125、『スルタンの衣裳』 p120
- 34 *Sözlüğü* p174,175
- 35 *Sözlüğü* p251、*Defteri* p67
- 36 Kellner-Heinkele,B-D.Rohwedder(ed.).*Türkische Kunst und Kulturaus osmanischer Zeit.2c.*, Recklinghausen,1985.Laqueur,HansPeter.*Hüve 'l-Baki*.Tarih Vakfi Yurt Yayınları.İstanbul,1997 (以下 *Hüve 'l-Baki*) p138
- 37 *Sözlüğü* p215,216
- 38 *Sözlüğü* p236
- 39 *Sözlüğü* p59-61
- 40 *Sözlüğü* p92,231
- 41 *Sözlüğü* p193-195,205
- 42 *Sözlüğü* p93-95
- 43 毛織物の一種。衣装のほかに肩掛け、膝掛け、風呂敷、テーブルクロス、カーテン、ソファ・カバーなどに使われその利用範囲は広い。『スルタンの衣裳』 p165
- 44 *Sözlüğü* p160,161
- 45 *Sözlüğü* p152,153
- 46 *Sözlüğü* p220
- 47 竹内和夫『トルコ語辞典』大学書林,1989
Redhouse Sözlüğü.Redhouse Yayınevi.İstanbul,1995 では *kavuk* は *quilted turban*、*sarık* は *turban* とある。
- 48 *Sözlüğü* p202,203
- 49 *Sözlüğü* p148-151,202、*Defteri* p67
- 50 メフメト 1 世が被り、それから広まったとされる。İzzet Kumbaracılar.*Serpuşlar*.Türkiye Turing Ve Otomobil Kurumu Yayını.y.y.,t.y. (以下 *Serpuşlar*) p9
- 51 *Sözlüğü* p46,47,55,86,148,191、*Serpuşlar* p9,19,21
- 52 *Sözlüğü* p178,203,204、*Serpuşlar* p10,19
- 53 *Sözlüğü* p140,141、*Serpuşlar* p18、*Hüve 'l-Baki* p153,154
- 54 *Hüve 'l-Baki* p144-147
- 55 *Sözlüğü* p184、*Serpuşlar*p18
- 56 *Sözlüğü* p162
- 57 *Sözlüğü* p148,235,236,237、*Serpuşlar* p24
- 58 *Sözlüğü* p24,25、*Serpuşral* p15 他に *yedekçi baratası* や *sofalı baratası* など
- 59 *Sözlüğü* p139、*Serpuşral* p23
- 60 *Sözlüğü* p211
- 61 *Hüve 'l-Baki* p139
- 62 *Sözlüğü* p29,117,118,246
- 63 *Sözlüğü* p63
- 64 *Sözlüğü* p77,78
- 65 *Sözlüğü* p76,173
- 66 *Sözlüğü* p228,229